

思想史と対話



私は、ずっと哲学史、フランス現代思想、ジル・ドゥルーズの哲学を勉強してきました。つまり、アカデミックなキャリアのなか（だけ）にいました。2022年頃に、フランス留学を終えて博士号を手にし、長い大学院生時代を終えました。その少し前から日本で非常勤講師のお仕事もいただくようになっていたなかで、偶然のご縁があり、美容専門学校での講師を依頼されました。

しかし、当たり前のことながら、多くの専門学校生たちは哲学史など興味ありません。。それはそれで、彼らは2年間で美容師の国家資格を得るために来ているのですから、なんで哲学？という感じでしょう。

どうしようかな、と思っていたなかで、当時、哲学業界でも認知度があがってきていた哲学対話のことを思い出し、これにトライしてみよう、と思い立ちました。

やり始めてみると、これまでの自分の学びと、哲学対話の場が、理論と実践の両面で共振していることに気づきはじめました。そうして、フランス現代思想史の学びと対話実践との間で考えるという方向性が出てきました。瞬間と永遠、子どもに-なること、人称性の手前、真偽と信疑の此方にある思考・・・。

とはいえ、現状では、アカデミズムの世界ではアウトリーチ活動に勤しんでいるようにしか見えず、学内的にも学外での交流活動にわりと熱心な学科教員にしか見えていないことは理解しています。

《わたし》のなかの直観を言語化するエクリチュールと、それを具現していく実践形態の模索を継続していくことで、今の状況を切り抜けていきたいです。現在の悩みは、わたしは対話の場を生み出すこと自体に価値があると思っているのに、周囲の多くのひとたちは、対話の場が何をもたらすのかでしか評価しないことです。

戸澤幸作 京都市立芸術大学 講師(哲学)

E-mail k_tozawa@kcua.ac.jp
<https://researchmap.jp/tozawakosaku>

